今週の為替相場見通し（2020年3月2日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		107.51 ～ 111.68	108.05	106.50 ～ 109.50
ユーロ	（ドル）		1.0805 ～ 1.1053	1.1027	1.0700 ～ 1.1100
（1ユーロ=）	（円）		118.40 ～ 121.06	119.25	118.00 ～ 120.50
英ポンド	（ドル）		1.2726 ～ 1.3018	1.2821	1.2600 ～ 1.2900
（1英ポンド=）	（円）	*	137.53 ～ 144.63	138.41	135.50 ～ 139.50
豪ドル	（ドル）		0.6435 ～ 0.6622	0.6507	0.6400 ～ 0.6650
（1豪ドル=）	（円）	*	69.38 ～ 73.91	70.37	68.20 ～ 72.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第ニチーム　高村 尚史

（1）今週の予想レンジ：　106.50 ～ 109.50 円

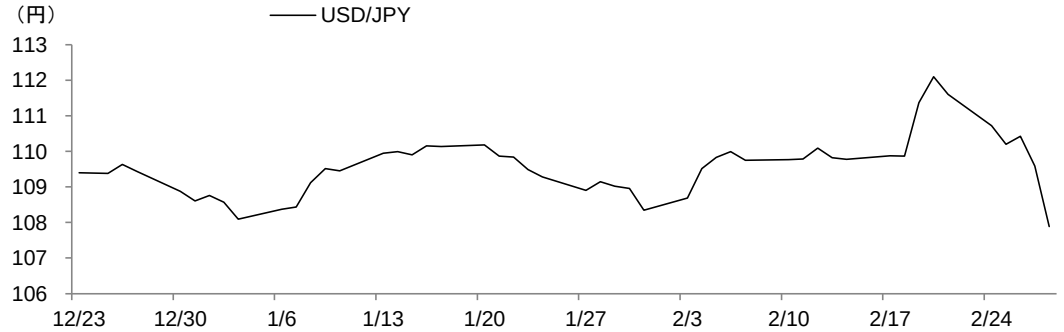
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は下落した。週初東京祝日の24日、111円台後半で推移していたドル/円は、新型コロナウイルスの感染拡大が世界的に進みリスクオフの円買いの動きが強まった。その後もNYダウ平均などが下落し、米金利が低下する中でドル売りが強まり、一時110円台前半まで急落。25日も米10年債利回りが低下、NYダウ平均が一時900ドル超の下落を見せるなどリスクオフの展開が継続、ドル/円は一時109円台を付けた。26日はアジア株が下げ止まる展開を受けて値を戻す場面が見られるも、米10 年債利回りが1.3%台を割り込む中、再度110円台前半まで下落。27日は日経平均株価が続落し、米株が下げ幅を縮小する場面では一時110円台に戻す場面も見られたものの、米10年債利回りが更に低下し、NYダウ平均が前日比1190ドルと過去最大の下げ幅を記録する中、ドル/円も再度110円を割り込んだ。28日は新型コロナウイルスの感染状況の世界的な拡大が伝えられる中、日経平均株価やアジア株が下落し、ドル/円は108円台へ。海外時間もリスクオフの展開が継続し、パウエルFRB議長が利下げの可能性を示唆すると、米10年債利回りが1.2%台を割り込むなど米金利が更に低下。ドル/円は下げ幅を拡大させ、107円台前半で越週した。また週末に発表された中国の2月製造業・非製造業PMIが急低下したことなどを受け、週明けのドル/円は一時107円ちょうどまで下げ幅を拡大している。

今週のドル/円相場は買い戻される展開を予想する。世界各地で新型コロナウイルスの感染拡大が伝えられ、先週末には中国で2月のPMIが大きく悪化するなど、実体経済への影響も懸念され、すっかり新型コロナの動向がマーケットの主役となってしまっている。先週だけでNYダウ平均は3,000ドル超、日経平均は2,000円を超える下落幅を示現。FRBが利下げを3回実施した2019年の上昇分をほぼ吐き出した形となっており、実体経済への影響をまだ見極めることができていない中、株が売られすぎている感は否めない。また、震源地となっている中国における景気下支え策が検討されているだけでなく、FRBもパウエル議長より利下げを示唆する発言が飛び出した。係る中、金利先物市場に目を向けると米国の3月利下げが完全に織り込まれており、50bpの利下げまで予想されている状況となっている。既にここまで織込みが進んでいることから、今後は米金利の低下も限定されていくものと想定され、ドル/円相場については買い戻しの動きがあると見ておきたい。

（3）先週までの相場の推移

先週（2/24～2/28）の値動き：　安値 107.51 円　高値 111.68 円　終値 108.05 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第一チーム　小野崎 順基

(1)今週の予想レンジ:　1.0700　～　1.1100　　118.00　～　120.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

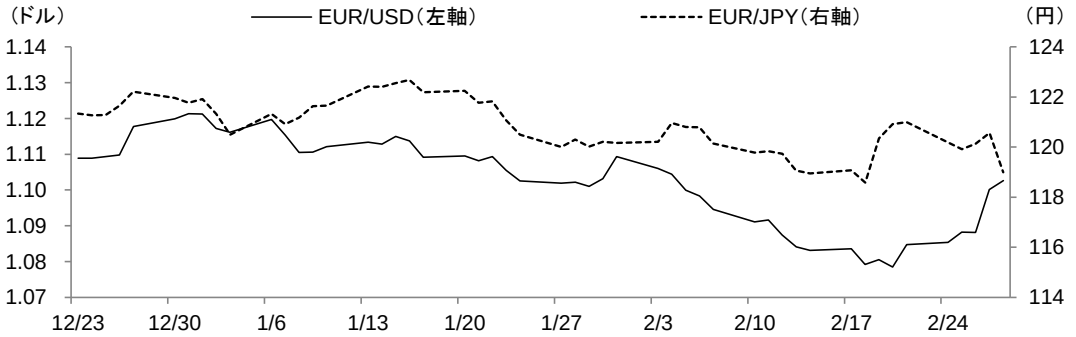
先週のユーロ/ドル相場は週後半に高値圏を推移。週初24日に1.08台前半でオープンしたユーロ/ドルは独2月IFO企業景況感指数が予想を上回るも方向感は出ず、その後、米金利の低下を受けたドル売りに1.08台後半まで上昇した。25日は、前日同様、米金利を睨みながらの上下する展開で、米金利が低下する動きに1.09ちょうど付近まで上昇。26日は米金利が上昇、堅調な米株を背景に1.08台半ばまで下落したが、再び米金利が低下に転じたことでドル売りが強まり、1.09台に反発。27日は、米長期金利が過去最低水準を更新し、2月6日以来、約3週間ぶりに1.10台を回復。米金利低下が一巡すると、1.09台半ばまで反落したものの、米株安・米金利低下の地合いが続く中、1.10付近まで上昇した。28日には東京時間は1.10 付近で推移していたものの、海外市場に米金利低下を受けてドルが売られたことから1.1053まで上昇。しかし、米株売りに下落したユーロ円に連れ安となり、1.0951まで下落。その後は、米金利の下落が続く中、ドル売りも強く、再び1.10台ミドルまで反発した。

今週のユーロは軟調推移を想定。新型肺炎の脅威が続く中、中国の経済活動が低迷する可能性は十分に考えられ、外需依存型のユーロ圏は多大な影響を被りそうである。昨年末から今年初めにかけては底打ちの見られ始めていた欧州経済だが、新型肺炎の影響によって2020年に入って欧州経済が景気回復軌道に乗るという期待は淡いものに終わりそうである。また、これと並行してBrexitを巡る不透明感もユーロの重石となるだろう。1月にEU離脱を完了させた英国だが2020年末に終了する移行期間の延長決断期限である6月末まであと4か月だが、ジョンソン政権は延長しないことを法案化しており、年内に英国とEUの交渉をまとめなければならない状況にある。これら交渉に向けて自由貿易協定締結などの対EU交渉の基本方針を発表した英国政府は、9月までの妥結を目指すと表明した一方で、6月までに十分な進展がなければ決裂も辞さないとの強硬姿勢を示している。このようなスケジュール感のもと、英国とEUは「公正な競争条件」や「漁業権」を中心に対立しており、これら協議が難航する可能性は十分に考えられる。新型肺炎による景気先行き懸念、Brexit交渉を巡る先行き不透明感を背景に今週のユーロは下値模索の展開となるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/24～2/28)の値動き:

(対ドル)	安値 1.0805	高値 1.1053	終値 1.1027
(対円)	安値 118.40	高値 121.06	終値 119.25



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.2600　～　1.2900　　135.50　～　139.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

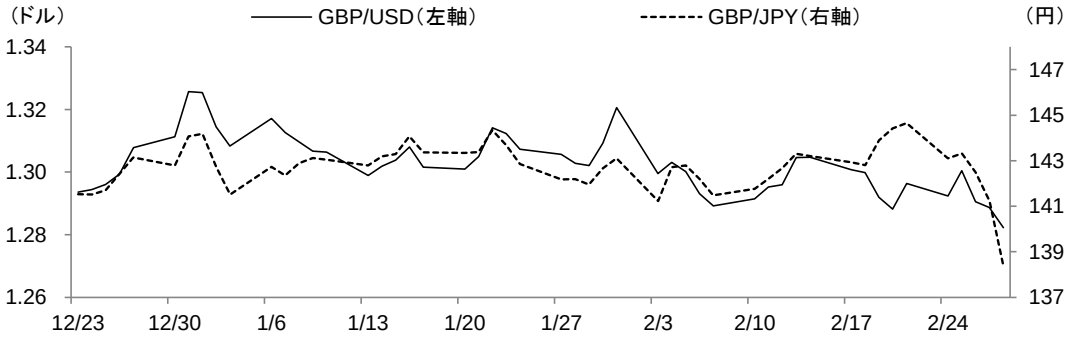
先週の英ポンド相場は、対ドルで上昇後、反落。対円、対ユーロでは軟調気味の横這いから、ほぼ一方的な下落を続け、週後半は主要通貨に対して全面安となった。前週まで3週連続で進んでいたドル全面高と、円、ユーロの軟調という構図は逆転した。週明け24日の金融市場は、新型コロナウイルス感染拡大に対する警戒感の強まりで始まった。イタリア、イランなどにおける罹患者・死者数の増加を受け、リスク回避姿勢が強まり、週明け早々から円の買戻しは明確に進んだが、週央からはドル安の流れも加速した。ドル安が米株の続落や米連銀による利下げ観測の高まりと並行したのは間違いないが、それぞれそのきっかけははっきりしなかった。同ウイルスに関するトランプ米大統領の演説(26日)が楽観的に過ぎた=危機感が足りないとの見方は確かにできただろうが、それ以上に、同大統領による27日の米連銀批判(「金利を下げない米連銀が悪い」)などが材料視されたのではないだろうか。週後半に掛けては、そうして軟調推移を明確にするドルに対してもポンドは売り込まれた。28日には1.28を割り込み、一時、昨年10月央以来4か月半ぶりの安値となる1.2753まで急落。ポンド全面安と言えるこの値動きの背景には、英とEUの将来関係に対する不安の強まりがあったものと考えられた。27日には、英政府から「自由貿易交渉などに十分な進展が得られなければ、6月までに交渉を打ち切る」旨の発言が聞かれた。EU側の譲歩を引き出す為の交渉術の一環とはわかっていても、通貨市場として、こうした強硬姿勢を看過するわけにはいかなかったということであろう。

今週の英ポンド相場は、もう一段の下落を予想。昨今の英政府の姿勢は、大人の注意を惹きたいがために悪戯を繰り返している子どものように見える。今のEUに取って危急の課題は、伊を中心に拡散の可能性を見せる新型コロナウイルスの封じ込めであろうし、英離脱交渉のおかげでこれまで遅れに遅れてきた中期予算(2021～27年)交渉であろう。英がEUの加盟国で居続ける可能性が残されていた昨年末までは、駄々をこねる英のことを、EUも無下に見放すわけにはいかなかったはずだが、1月末の正式離脱以降、課題としての優先順位が落ちるのはやむを得ない。そうした潮目の変化に気付かないまま、今後も英が徒に強硬姿勢を続けるのであれば、EU側にも(手が回らない以上)放置する以外の選択肢はなくなろう。先週、それまでの全面高から一転全面安に陥ったドルに対してすらポンドが売り込まれた背景に、金融市場全般におけるこうした認識の共有があったのなら、ポンド反発は当面見込めないだろう。今週から始まる予定の自由貿易交渉において、英側が強硬姿勢を緩める可能性は考え難く、通貨市場がポンド売りに傾き易い状況は変わらないのではないか。並行して注目される英予算発表(3月11日)だが、内閣改造(2月13日)直後こそ期待が盛り上がった「歳出大幅拡大」「英景気押し上げ」見通しだが、現在までにそうした期待感はすっかり萎んでしまったように見える。2022/23年度までの中期的財政を均衡させるとの選挙公約(昨年12月総選挙における)に鑑みれば、大胆な歳出拡大余地は限られているとの読みだ。予算に関して、なんらかの漏洩(意図的なものも含む)があれば、ポンドが相応の反応(積極的な歳出にポンド買いなど)を示す可能性は想定できなくもないが、過度の期待は禁物だろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/24～2/28)の値動き:

(対ドル)	安値 1.2726	高値 1.3018	終値 1.2821
(対円)	安値 137.53	高値 144.63	終値 138.41



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

市場営業部　為替営業第一チーム　逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ:　0.6400　～ 0.6650　　68.20　～　72.00　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

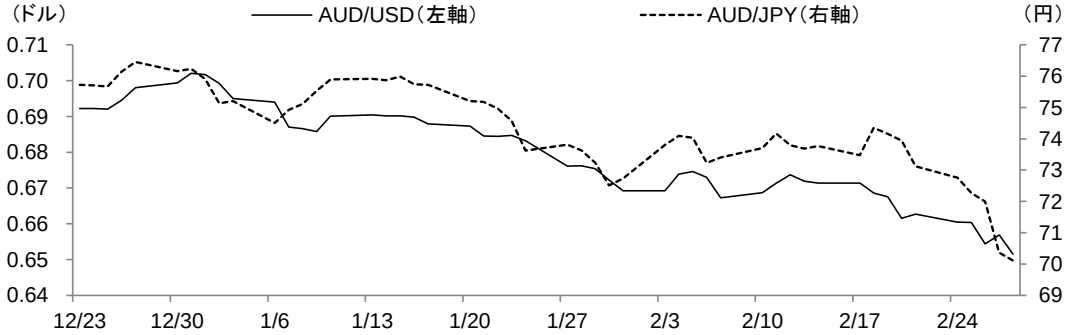
先週の豪ドル相場は週半ばから下落。週初、0.6604付近でオープンしたAUD/USDは、特段ヘッドラインのない中、0.6600を挟んで揉み合う展開。翌25日、コロナウィルスに対するポジティブなヘッドラインがでたことで、豪ドル買い地合いとなり0.6620近辺まで上昇。しかしその後、ウィルス拡大懸念が広がったことで欧米株が下落すると、AUD/USDは0.65台へ下落した。26日は、米食品医薬品局(FDA)からコロナウィルスについて、パンデミックに向かいつつあるあるとの認識が示されたことで、リスクセンチメントは悪化。グローバルに株式市場が下落し、AUD/USDは0.65台半ばまで下落した。27日、引続きコロナウィルス関連が市場の焦点になる中、株式市場は軟調に推移。株安・債券高の流れが継続する中、FRBによる利下げ観測の高まりから米ドルが売られる展開に、AUD/USDは0.6600手前まで上昇した。週末28日、主要株価の続落を横目にジリジリと下落。欧米時間に入り株価がさらに下落すると、一時11年ぶり安値となる0.6435をつけた。一巡後は、米利下げ観測の高まりから、0.65台まで値を戻し越週。

今週の豪ドル相場もコロナウィルスの感染状況を睨みながらの展開となるであろう。各国のコロナ感染者増加に伴い、世界的な株安・債券高の流れとなっているが、市場では、コロナのネガティブインパクトを緩和するため、FRBによる早期利下げ観測が急速に台頭したことで、ドル売り地合いとなっており、豪ドル相場の下支え材料となっている。しかし今週は、スパーチューズデー(米大統領選)のほか、米ISM製造・非製造、雇用統計など、コロナの影響を見極めるうえでの重要な材料が公表されるが、指標の結果が良くとも現在進行形で感染拡大しているコロナの不透明感を払拭できないであろう。一方で市場予想を下回った場合には、リスクオフムードが強まる展開が想定され、豪ドル相場の下落に警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/24～2/28)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6435　高値 0.6622　終値 0.6507

(対円) 安値 69.38　高値 73.91　終値 70.37



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。